

2015年夏期モンゴル調査筆記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学東洋史談話会 公開日: 2020-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 智美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21308

《調査報告》

2015年夏期モンゴル調査筆記

櫻井 智美

2015年8月2日～15日の日程で、中国内蒙古自治区の呼和浩特（フフホト）市とモンゴル国のウランバートル・ハラホリンを訪問した。「モンゴルの歴史を勉強しています」と言いながら元上都（現内蒙古自治区錫林郭勒盟）までしか北上したことがなかった私は、今年度在外研究という時間と科研費（題目「モンゴル帝国治下江南知識人の「中国」認識」）を得て、長年の希望であったモンゴルでの現地踏査を行うことができた。この調査の行程と成果について簡単に報告する。

【調査日程・内容】

2015年8月2日。移動日。CA0182及びCA1105で、羽田空港から北京空港を經由し、フフホト市へ移動、錦江国際大酒店に宿泊。フフホトでは、内蒙古師範大学蒙古学学院蒙古史研究所の謝咏梅先生及び内蒙古大学蒙古学学院蒙古歴史学系の娜荷芽（ナヒヤ）先生の全面的な協力を得た。紙上を借りて深謝申し上げたい。

3日、内蒙古大学蒙古学学院にて、蒙古歴史学系の朝克図（チョクト）先生、額爾敦巴特爾先生、蘇徳畢力格先生ら及び謝先生と、研究交流・座談会を行った。蒙元史研究の現状及び科研費の研究課題について、内蒙古における研究状況を中心に情報交換し、今後の協力関係を確認した。その後、蒙古学院所蔵の石刻について簡単に調査した。午後、内蒙古大学民族博物館において、元代パスパ文字金牌、契丹文字碑刻などを見学。学内の博物館として充実した展示内容であった。

4日、フフホト市東郊外の遼豊州故城に向かい、故城の現状を踏査。現状で実見できる遺跡は限られていると聞いた。『中国文物地図集 内蒙古自治区分冊』上下巻（西安地図出版社、2003）に拠れば、20世紀に大量の貨幣や元代窖蔵が発見され、『内蒙古文物考古』『文物』に成果が掲載されている。豊州城の西北角にあたる遼代建造の万部華嚴経塔（金代重修、俗称白塔）にのぼり、塔内の墨書題記を調査（写真撮影・筆記など、調査手法は以下同じ）。展示スペースには、塔内で発見された珍しい中統元宝交鈔（壹拾文）もあった。その後、現地に集められた石刻史料を調査。元代の篆額部分を発見した。「大元加□/聖號之□」の文字が読める（通し番号①、以下の通し番号は元代文字石刻にふる）。篆額の裏に文字は無く、下部は欠けている状態で置かれていた。午後、内蒙古博物院にて、元代石刻史料を中心に調査。「張氏先塋碑」漢文面のレプリカ②、「元代シリ

ア文石碑」③、「パスパ文字石経幢」(ウイグル文字も)④、集寧路出土「至元四年石碑」⑤ほか、世界遺産となった元上都の遺物、近年注目を集めた集寧路の陶磁器、金・銀聖旨牌、包頭市出土の「景教墓頂石」、烏蘭察布出土の「元代墓壁画宴居図」、「烏梁海百戸印」、「至元三十五年大都路銅權」、至元至元交鈔を初めとする貨幣等、数多くの元代遺物を実見できた。その後、博物院内の書店において内蒙古出版の関連資料を購入した。

5日、フフホト市から最も近い草原とされる達爾罕茂明安連聯合旗東南端の希拉穆仁蘇木(シラレムンソム)において、チベット仏教の寺院(普会寺)を訪問、僧侶より寺の歴史や参拝方法を聞く。伝統的な祭祀施設オボーの見学、遊牧民住居(正確に言えば定住して牧畜を営む)の訪問ほか、蒙古馬・羊・牛等の牧畜の様子を見学した。モンゴル国でもオボーや遊牧家庭を訪問したが、これらを通じて、短い時間ながら伝統的なモンゴル遊牧民の生活を体感することができた。

6日午前、内蒙古博物院の石刻史料について整理し、午後、博物院を再訪して石刻史料を中心に再調査した。また、別室の遼代以前及び近代モンゴルの展示も見学した。現在の内蒙古自治区におけるモンゴル民族史やチングスハーンの位置づけにも気づくことができた。

7日午前、アルタンハン建造の大召(無量寺)、ダライラマ4世由縁の席力図召(俗称小召、延寿寺)及び清真大寺(イスラム寺院)を訪問、寺内の碑亭を調査した。モンゴル時代のもは運び込まれていなかった。午後、清代建造の慈灯寺(五塔寺)内の金剛座舍利宝塔及びモンゴル文字の天文図(星図)を調査した。ガラスで保護されていた。蒙文天文図は現存唯一とされ、清代欽天監が蒙文で作製したものであった。その後、新華書店で元代関連資料を購入。この日と8日はナヒヤ先生の学生梁嘉琛氏に調査協力をお願いした。

8日午前、清の綏遠城城牆(城壁)残存部を調査した。かなりきれいに修復されているが元来のものと思われる箇所もあった。その後綏遠城牆將軍衙署を見学。正堂裏に石刻が多数あり、元代のものとして「景教鎮墓石」「石経幢首」の表示があった。文字が刻まれるものは多くないが(チベット文字・モンゴル文字他の石経幢⑥)、突厥時代以降の石刻が未整理のまま並べられているようであった。歴代の石刻が近隣の文廟や祭祀施設・公共施設に運び込まれる例は中国各地で見受けられ、文廟がそのまま現在博物館として転用されているところも多い。ここもその例の一つだと考えられる。次に、フフホト市博物館(清固倫恪靖公主府を利用した專題博物館)を調査。碑廊が整備されていたが、紀年のあるものは清代以降のものに限られた。内蒙古競馬場を訪れ、蒙古馬の現在の活用について話を聞き、また夕方に開かれるショーの練習の様子を見学した。

9日、CA1212及びCA955を乗り継ぎ、北京経由でモンゴル国ウランバートル市へ移動。チャーター車を利用開始して、フラワーホテルへ宿泊。モンゴル国での調査については、元大阪国際大学の松田孝一先生、龍谷大学の村岡倫先生、大谷大学の松川節先生に、現地との連絡のご協力や多大なるご助言をいただいた。三先生は毎年モンゴル国で調査を継続されており、その研究功

績がモンゴル国において高く評価されていることを今回目の当たりにした。先生方にここで改めてお礼申し上げたい。また、調査・移動には、通訳ガイド兼運転手として、アムガラン・ドルジ氏が同行してくださった。三先生の調査に度々同行されている氏のガイドは、初めてのモンゴル調査において大変参考になり、勉強する点も大きかった。氏にも深謝の意を表したい。

10日、ウランバートル市内で必要物を購入後ウブスハンガイ県ハラホリンへ移動。途中、ルン付近のトーラ河河川敷で休憩、ウラーンシベーの砂丘を経由してオルホン河沿いのハラホリンへ到着した。緯度が高いため午後9時頃まで明るい。オルホン溪谷地方は古来より常に遊牧集団が建てた王朝の中心地であり、モンゴル帝国においても初めて固定した城がここに建てられた。現在「オルホン溪谷の文化的景観」として世界遺産に登録されている。移動の途中、数え切れない家畜の群れに出会い、たくさんのオボーを通り過ぎた。共和国時代に開発された大規模農場（菜の花、じゃがいも等）も目にし、また、草原の中にある山や砂丘など地勢の変化を体感できた。内蒙古との共通点・相違点が明らかだった。ハーンタイジホテル（ゲル棟）に宿泊。

11日、ハラホリン東北に位置するハルバルガス遺跡（ウイグルのオールドバリク）を訪れ、モンゴル科学アカデミー考古研究所（オラムバヤル・エルデネバト教授が代表）とドイツ隊による東南角の宮殿跡の発掘の様子を見学した。ちょうど今年が発掘が終了したところで、調査の経過や成果を聞き床の石畳を見せていただいた。現在残る城壁の上からは、城外にも都市の広がりを表す土盛りのベルトが見えた。ハルバルガス遺跡や現在も断片が残る「保義可汗紀功碑」については、林俊雄氏の報告、森安孝夫氏が筆頭とする通称「ピチェース」⁽¹⁾及び奈良大学の調査報告がある。帰路、ガイドの手配で遊牧民のゲルを突如訪問した。乳製品や馬乳酒をいただき、蒸留酒アルヒの製造過程を見学した。裸に靴の男の子、バイクと衛星テレビアンテナが印象深かった。

12日、ハラホリンに残る遼代及びモンゴル時代の遺跡を調査した。清代建造のエルデニゾー内外には、獅子像や石刻亀趺（亀石）のほか、近年の調査で出土したモンゴル時代の宮殿跡とされる場所がある。宮殿跡は保存展示の準備工事が進められていた。一帯には当時のものと思われる煉瓦や陶器のかけらなどが散乱してした。エルデニゾー見学の後、カラコルム博物館（JICA 建設、2011年開館）においてモンゴル高原の各時代の遺物、及び突厥時代壁画墓の最新の成果を見学・調査した。モンゴル時代の遺物も多く、「勅賜興元閣碑」^⑦やパスパ字パイザ、北元時代の印章が室内に展示されている。松川氏らが近年発見した、エルデニゾーの建築資材として転用されていたモンゴル時代碑刻は、ハラバルガス遺跡の一部の石刻とともにカラコルム博物館の屋外に展示されていた。これらの研究は「ピチェース」の報告書に見られる。

13日、前日の夜、激しい風雨と寒さで眠れなかったが、カラコルムへの帰路、ホシヨーツァイダム博物館へ向かう。突厥時代のビルゲ=カガン碑文・キョル=テギン碑文、及び彼らの靈廟遺跡など周辺の突厥時代遺跡の現況を調査した。ミレニアムロードを経て、ダシチレン西北部の遼代

都市遺跡ハルボハ及びチントルゴイに立ち寄った。ハルボハの白樺文書の発掘には松田・松川両氏が参加されているほか、ハルボハ等の3D映像が奈良大学の「モンゴル国遺跡デジタルアーカイブ」としてウェブ上で公開されている。ウランバートルフラワーホテルへ到着。

14日午前、ザルサン・トルゴイからウランバートルを一望した後、モンゴルチベット仏教のセンターであるガンダン寺周辺を訪問。モンゴル国立大学のオユンジャルガル氏の招待で昼食をとる。その後、モンゴル国立歴史民族博物館及びザナバザル美術館において、突厥・キタイ・モンゴル帝国の遺物などを急ぎ調査し、関連資料を購入した。「釈迦院碑記」⑧、「宣威軍碑」⑨ほか元代石刻も数点展示されていた。最後にチンギスハーン広場を訪れた。

15日、CA902及びCA183で北京を経由して、羽田空港から入国した。

【石刻に関する補記】

元代石刻として①～⑨等を実見した。うち追跡調査したものにつき紙幅の範囲で補足する。

①「大元加□/聖號之□」の読めない部分は「封」と「碑」が入って「大元加封聖號之碑」となり、成宗大徳11年7月に出された孔子への「大成」加号の聖旨を刻んだ碑刻だと推測される。

森田憲司氏⁽²⁾によれば、内蒙古のものわかるものは京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究中心「京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料」と中国国家図書館「碑刻菁華」でウェブ公開されるが、それらには篆額の拓影はない。また出土地不明の拓本・拓影が東洋文庫や「石刻菁華」に見られるが、森田氏は篆額がある場合それに従って命名しているため、そこから現在見られる形で公開されていないと考えられた。『草原石刻録』（文物出版社、2013）にも見られない。

【総括】

今回の調査を通じて、モンゴルにおける遊牧民国家の主要遺跡を数多く訪問・踏査し、モンゴル帝国時代の原点を体験することができた。また、伝統的な祭祀（シャーマニズム・民間信仰・チベット仏教）と新たなチンギスハーンの信仰を調査できた。同時に、各地域や施設で多くの研究者と交流の機会を得て意見を拝聴できたことは望外の喜びであった。

最後に気づいた点を挙げる。まず、現在中国ではスマートフォン、それを利用した「微信」によるメールのやりとり、百度地図による地図検索が一般的となっている。モンゴル国でも携帯電話は欠かせない。これらの調達は必須である。また、内蒙古では思いがけない場所で未知の石刻と対峙した。これらを含め、十全の準備を、できれば同行者と分担しておくことが必須であろう。

註

- (1) 報告書として、森安孝夫・オチル責任編集『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』（中央ユーラシア学研究会、1999）、松田孝一・オチル編『モンゴル国現存モンゴル帝国・元朝碑文の研究－ビジュアル・プロジェクト成果報告書』（松田孝一研究室、2013）がある。
- (2) 森田憲司「可見元代石刻拓影目録稿」全7篇（『奈良大学総合研究所所報』17～23、2009-2015年）

[附記] 本報告は日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号 15K02912）による研究成果の一部である。